ユニバーサルデザイン

UD さがみはら

2026 July

Vol. 7

ユニバーサルデザインでインクルーシブ&ダイバーシティなまちづくり

◀KAH の樹さんの
自画像と作品

KAH の一歩さんの▶
自画像と作品

いま見えてきた“いっしょ”以上のインクルーシブの地平

●誰とでも　笑い、挑み、ともに楽しむ
――eスポーツはインクルーシブな共生社会を実現する手だてになる
――アールブリュットで知る表現の新感覚
――“ともに”だけじゃない　”とも生き“のともいき広場オープン
●舞台芸術誰にでも開くと、鑑賞体験が新しくなる

アクセシビリティ・ノート

UD（ユニバーサルデザイン）とは、
「みんなが暮らしやすくなるための工夫」のことです。

この通信は、令和８年度市民協働提案制度事業「ユニバーサルデザイン普及・啓発事業」として地域包括ケア推進課と NPO 法人ここずっとが発行するものです。

◀KAH の Daiki さんの
自画像と作品

ともいきゆうえんちプラス in 相模原 訪問レポ

2026 年3月 22 日、県立相模原公園と相模原ギオンアリーナを会場に「ともいきゆうえんちプラス in 相模原」が開催されました。前年が雨天のため中止になったこともあって、２年越しの期待を込めて訪ねました。
大温室「サカタのタネグリーンハウス」では、フェース of ワンダーのアートピザのワークショップやｅスポーツ体験など、緑のなかに広がる別世界の趣きに圧倒されました。
「よくできたコンピュータゲームだろう」ぐらいにしか思っていなかったのが、「なるほど、これで “ともいき” を実現していくんだ！」と遅まきながら認識がくつがえされ、目覚めることになりました。

レポート そのいち　アートが生み出す笑顔の空間

フェース of ワンダー　https://www.faceofwonder.com/
主宰　金子　光史　さん

「サカタのタネグリーンハウス」の２階では、フェース of ワンダーのアートピザのワークショップが行われていました。こちらのワークショップは市役所前の「さがみはら SAKURA 路上アート」や、季節ごとに場所を変えて市内のあちこち開催され、いきいきと取り組む子どもたちの姿と一緒に目にした方も多いのでは。代表の金子光史さんに取り組むお気持ちを投稿いただきました。

展示された「アートピザ」

2026 年３月 22 日、フェース of ワンダーの仲間たちと『アートピザを作ろう！』の活動を行った。

普段は街中の広場などにブルーシートを敷いて、絵の具だらけになって大きな絵を描く路上アートをやっているのだけれど、今回は室内ということで、絵の具は使わず、ダンボールで作ったピザに一人ひとりが好きなトッピングを作ったり、描いたりして、世界のどこにもないアートピザを作る活動。

ピザっていろんなモノでできている。いろいろな食材が集まって、子どもたちの大好きなピザが生まれる。これって、フェース of ワンダーの仲間たちが目指しているアートと同じ。障がいの有無や年齢や国籍の違いを超えて生まれる、笑顔のアート。

どんなピザにしようか？と考えながら、トッピング用の紙や緩衝材に色を塗ったり、切ったり、オリジナルなピザを目指す。ロケットや虫やアニメの顔などいろいろなものがピザに盛られていく。いつの間にか一緒にいた大人たちも夢中になって作り始める。知らない隣の人と交換したり、共同で巨大ピザを作り始めたり、笑顔と笑顔がつながって、とても柔らかで居心地の良い空間が生まれる。

こんなアートの空間が相模原のいろいろな場所で生まれるといいなあと思う。上手もへたっぴも超えて、自由で自遊な時間をいろいろな人と共に作っていきたい。
もしやってみたいなあと思う方はご連絡くださいね。

ワークショップの様子

誰もがもっと多様に楽しめる表現を

障がい者アート支援活動　Art brut KAH
会長　甘利智明さん
https://www.instagram.com/art.brut.kah/

フェース of ワンダーで表現を学んだ 18 歳の３人の青年が、桜台美術館で６月 27 日（土）に作品展を開催しました。台風が引き連れた雨模様にもかかわらずの盛況。来場者からは一日だけの展示ではもったいないという声が上がりました。

開催したのは Art brut KAH（アール･ブリュット･カフ）。2023 年に結成され､当時中学１年生の Daiki さん､樹（たつる）さん、一歩さんの名前の頭文字をとって「KAH」と名付けられました。機会を見つけて３人で制作に取り組んだり、作品展を開いたりしています。会長は一歩さんのお父さんの甘利智明さん。甘利さんは親子で表現に取り組むワクワク感について、作品展が家族に共有の体験をもたらしてくれると同時に、３人にとっても言葉にはできない内面の変化が萌しているのも感じられると語ります。また、一般の人に存在とその表現が知られることで、お互いの存在に怖れを抱かず認め合う機会となることを期待しているそうです。最近は、アールブリュット作品の独創性がアートとして認知されることで、ロイヤリティを得られる仕組みも生まれつつあり、市民に新しい表現を楽しむ機会をもたらしています。３人の型にとらわれない自由な造形や色遣いは今号の表紙でも十分に感じられるのではないでしょうか。

●KEYWORD「桜台美術館」　2006 年に相模原市立桜台小学校の空き教室（多目的ルーム）を利用して開設された、校内美術館の先駆け的な存在。地域住民で組織された運営委員会が主体となり（現在の運営委員長は元校長の竹内祥子さん）、年間を通じて様々な絵画や写真などの企画展を運営。児童の鑑賞スペースとしてだけでなく、一般市民にも公開、地域コミュニティの核となり、文化拠点となっている、小粒だけどキラリ、注目の美術館です。

レポート そのに　ｅスポーツはインクルーシブな共生社会を実現する手だてになる

ｅスポーツの企画・運営・支援を実施している株式会社 ePARA　https://epara.jp/about/
代表取締役 加藤大貴さん

案内してくれた株式会社ｅPARA 代表取締役・加藤大貴さんにお話を伺いながら、車いすや四肢欠損の障害を持つ青年たちとｅスポーツに興じるうち、その可能性を感じることができました。

代表取締役 加藤大貴さん

――品川区社会福祉協議会の成年後見センターで勤務されていて、そこで出会った仲間と障害者 e スポーツ大会を企画し、その後「株式会社 ePARA」を設立されたそうですが、思い切って転身されたｅスポーツの魅力、可能性とはどんなものでしょうか？

社会福祉協議会職員時代、障害者の「働きたい」という願いと、就労継続支援 B 型の平均工賃が月額２万数千円という厳しい現実のギャップに直面しました。マイナスをゼロにする従来の福祉に限界を感じていた時、着目したのが e スポーツです。

e スポーツは年齢や障害の壁を越え、デバイスの工夫次第で誰もが同じ土俵で対等に競えます。さらに、そこで培う PC 操作やオンラインでのコミュニケーション能力は、現代のビジネスで求められる IT スキルそのものです。e スポーツは、障害者の強みを可視化し、社会での就労へと直結させる強力な武器だと確信しました。

――ｅスポーツで対戦しているとき、みなさん、とても明るく積極的で障害の有無を感じさせませんでした。そこに福祉を超えるヒントがあるのでしょうか？

まさにそこに福祉を超える「超福祉」へのヒントがあります。日常生活では支援や配慮を受けることが多い当事者も、適切なデバイス（あご用コントローラーなど）を使えば、ハンデなしの真剣勝負ができます。そこにあるのは純粋に「勝ちたい」「悔しい」という熱狂です。彼らは「支援される対象」というペルソナを脱ぎ捨て、対等なプレイヤーになります。この対等な競争による成功体験が自己肯定感を回復させ、「もっと上手くなりたい」という欲求が、やがて「自らの能力で社会で活躍したい」という強い意欲へと直結すると考えています。

―― e スポーツは、今後どのような展開をみせていくでしょうか？　また、期待されますか？　それは、社会を変革していく力を秘めていると思われますか？

e スポーツは単なる娯楽の枠を超え、ダイバーシティを推進する「社会インフラ」へと進化していくと期待しています。例えば、弊社では障害当事者が講師となり企業の社員に e スポーツを教えるビジネス研修を行っていますが、ゲームでの共創を通じて「支援すべき対象」から「対等な同僚」へと参加者の見方が一変します。また、『ストリートファイター 6』の音だけで状況がわかる機能の開発に全盲ゲーマーが協力したように、彼らが価値を生む存在として開発に参画する事例も生まれています。e スポーツは、社会の「できる･できない」の境界線を軽々と越える力を持っています。

――ご著書『超福祉』を出版されました。「障害者と稼ぐ」と刺激的なコピーを付されていますが、広くどのようなことを伝えられているのでしょうか？

「障害者福祉」と聞くと慈善事業を思い浮かべるかもしれませんが、私が伝えたいのはこれからの日本のあり方です。従来の福祉が目指すマイナスをゼロにする支援から一歩踏み出し､彼らの個性を活かしてゼロをプラスにすることが｢超福祉｣です。法定雇用率を満たすためや支援事業として｢障害者“で”稼ぐ｣のではなく､当事者が IT スキルなどを武器に対等なパートナーとして共に価値を生み出す、「障害者 “と” 稼ぐ」社会を作りたいという思いを込めています。遊びを起点に個性を発掘し、社会のルールを変える「挑戦の連鎖（コンボ）」を起こしていきたいです。

グリーンハウスでｅスポーツ体験

「超福祉 障害者と稼ぐ
ｅスポーツ × 福祉で未来を変える」
著：加藤 大貴　講談社

加藤さんが６月に出版！ 書名は､ズバリ「ビヨンド福祉」

「障害者の数は国民の１０人に１人、全国でおよそ１１６０万人と推定されている。そのうちのおよそ半数、６００万人は就労可能とされている」（本文４ページ引用）から始まり、いわゆる就労作業所賃金レベルを超える就労の可能性を指摘する本書は、「誰もが」の UD 視点が、経済的に閉塞した社会の突破口を開くことを教えてくれる元気が出る本です。「できない」と諦めるのではなく、「挑戦」を耳元でささやいてくれる本書は、目からウロコが取れるように「ともに生きる」ことを教えてくれます。

県立相模原公園
ともいき広場オープン

インクルーシブの仕掛けを生かす交流こそ にぎわい続くカラフル広場に どうぞ

４号でともいき広場建設計画についてお知らせし、その後、クラウドファンディングのお知らせをしてまいりましたが、４月２５日、知事と相模原市長を迎えてオープン式典が行われ、県下でも有数のインクルーシブ広場としてオープンしました。

式典後、早速に広場が開放され、お目当ての遊具に駆けていく子どもたちがほほえましかったです。来場したお母さんは、「こんなにカラフルだと気分がアップします」と色彩豊かで見慣れない遊具の数々に目をやっていました。ともいき広場の評判は口コミで伝わり、駐車場が満車になるほどのにぎわいだそうです。インクルーシブとは、ただ、同じ公園で遊ぶというだけでなく、そこで出会いがあって、交流が生まれてこそ。利用する市民の意識からボトムアップが進み、広場でさまざまな楽しいハプニングが生まれることを願うものです。

ともいき広場完成式典

つくり手市民を応援する手引き書 アクセシビリティ・ノート

企画・発行元　株式会社 precog　https://precog-jp.net/

THEATRE for ALL （劇場体験にアクセシビリティを実装した配信サービス）と NPO 法人ここずっとは協働で字幕・音声ガイドに取り組んできました。その運営をしている株式会社 precog さんが５周年を記念して、これまでのノウハウをまとめた『アクセシビリティ・ノート』（ルーズリーフ形式、全 65Ｐ/ 書き込めるレポート９枚付き）を発行しました。

これは、開催するつくり手側が、どのような工夫をすれば、誰もが楽しめるものになるかのヒント集です。このヒントを小さな市民企画でも生かしてほしい、生かすことで市民活動自体の質も変わるし、担い手との出会いも拡がると、提案したく、こちらに紹介させていただきます。

内容は４章立て。①知っておきたい基本理念（合理的配慮が何かを解説）、②イベント運営者の視点のアクセシビリティ設計（運営・受付の仕方など）、③舞台の解説を考える（公演の工夫の具体例など）、④障害とコミュニケーションやサポートのこと、となっています。市民活動をしている方に参考にしていただきたいのは特に第４章。「市民」とひと括りにしてしまいますが、ひとりひとりが個性をもち、多様な困りごとをかかえています。その気づきを共有するだけで、見えてくるものがあります。小さな市民活動、集まりでこそ、持ちたい視点だと考えます。

防災 おたすけ インクルーシブ思考の ミニホワイトボード

特別に防災用品というわけではありませんが、「おはよう日本！」でも紹介された携帯できるホワイトボード。とにかくかわいい！
二つ折りにして 12ｃｍ×8.5ｃｍ。ペンとハート型のボード消しの入るポケット付きでバッグの中に入れておいても邪魔になりません。静かにしなきゃいけない環境でお子さんのお絵描きに使ってみたり、筆談で会話をしたり。
聞こえない、聞こえにくい人と外出先で出会っても安心です。余り布があってマーカーの使える素材ならお手製のバリエーションも楽しめそうです。

出典：生き方のデザイン研究所　https://www.ikikatanodesign.com/

UD さがみはら vol.7　■ 2026 年 7 月 25 日発行
相模原市地域包括ケア推進課・NPO 法人ここずっと
〒252-0303　相模原市南区相模大野 9-6-18
☎042-851-5646　FAX042-742-0447
http://www.cocozutto.jp/

UD さがみはらのバックナンバーの音声版は右記 QR コードの YouTube チャンネルから聞くことができます。

☞みなさまからのご意見や情報提供を募ります。
投稿先⇒e-mail:udsagamihara@cocozutto.jp

@ud_sagamihara
ud_sagamihara